

第18回ミツバチ科学 研究会に参加して

加藤 雅彦

ミツバチに対し、浅学である私にとって、本研究会は日頃疑問に思っていることを諸先輩方に質問することができる良い機会でもあり、毎年楽しみにさせていただいている。今回は1996年1月14日に開催され、会場は立ち見ができるほどの大盛況ぶりであった。

午前は、シーアンドエス(株)の生田氏の「ミツバチの巣内環境における扇風行動の役割」の研究発表から始められた。ニホンミツバチ(頭を巣外にむけて扇風)とセイヨウミツバチ(頭を巣内にむけて扇風)を比較しながらのその役割の相違についての発表は、基礎的な観点から非常に興味ある内容であった。

次は神奈川農業総合研究所の浅田氏から「日本産マルハナバチのトマトのポリネーターとしての利用の可能性」が発表され、オオマルハナバチとクロマルハナバチの室内飼育の可能性について、さらにトマトの訪花性をトラマルハナバチ、コマルハナバチを加えて検討したところ、訪花性は4種とも、対照としたセイヨウオオマルハナバチとの差がほとんどなく、日本産



図1 発表する中村氏

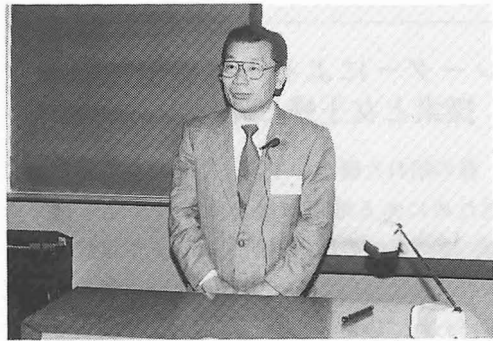


図2 講演中の阿部氏

マルハナバチのポリネーターとしての実用化の可能性が示唆された。

一般報告では、吉田助教授から昨年、スイスで開催された国際養蜂会議について報告され、その中でアピスタン抵抗性のダニが出現したとの報告がドイツ、イタリアからあったとのことであった。松香教授からはアジア養蜂研究協会の報告、酒井教授からは今年開催される第3回アジア養蜂協会大会の開催場所であるベトナムの準備状況について報告があった。

午後の特別講演は、中村講師が「ミツバチにとってのプロポリス」で最近話題のプロポリスがミツバチにとってどのようなものなのかという点から説明され、集める目的などもまだ正確に把握されていないことから、人間に対する効能の点ばかりでなく、ミツバチの立場からみても研究課題の多い材料であることが指摘された。

次に理化学研究所の阿部氏が「スズメバチ栄養液と運動」について講演され、大型で飛翔力の強いスズメバチのエネルギー源は何かということに着目し、疲労させない物質「VAAM」の発見とその効果について発表された。

本研究会は、毎年素晴らしい発表、講演があり、意見交換もできる場で、一日あつと言う間に過ぎてしまう。本研究会を主催する玉川大学の方々に感謝が絶えない。今後も参加させていただきさらにミツバチの勉強をしていきたい。

(〒300-12 牛久市結束町 535

(株)日本植物防疫協会研究所)